

各 関 係 機 関 団 体 の 長 } 殿
各 病 害 虫 防 除 員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病害虫防除所)

令和 2 年度病害虫発生予報第 4 号 (7 月) について

このことについて、病害虫発生予報第 4 号を発表したので送付します。

予報第 4 号

チョウ目害虫の発生動向にご注意を！

今年のアサマシロトウやオオタバコガのフェロモントラップでの誘殺数は、梅雨前線の北上に伴い、地域によっては、6 月中旬より急増し、平年より多い傾向にあります。

また、向こう 1 カ月の気象予報では、平年に比べて気温が高いとされていますので、チョウ目害虫の発生が増加することが予想されます。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新していますので、発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。



フェロモントラップ (筑紫野市)



大量に誘殺された
アサマシロ



アサマシロ成虫



オオタバコガ成虫

＜予想される向こう1か月の天候（令和2年6月27日～令和2年7月26日）＞
 期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

向こう1か月の降水量と日照時間はほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並30 高60% 高い 見込み	少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み	少40 並30 多30% ほぼ平年並の見込み

（福岡管区気象台 令和2年6月25日発表抜粋）

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	セジロウンカ	多	多	多
	トビイロウンカ	やや少	やや多	やや多
カンキツ	黒点病	並	並	並
	かいよう病	並	並	並
	ミカンハダニ	やや少	やや少	並
ナシ	黒星病	やや多	やや多	多
	ナシヒメシンクイ	並	並	並
	ハダニ類	やや多	やや多	やや多
カキ	炭疽病	並	並	やや多
	フジコナカイガラムシ	並	並	やや多
	ハマキムシ類	並	並	並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	多	—	多
冬春イチゴ (育苗期)	うどんこ病	やや少	並	並
	炭疽病	並	やや多	多
	ハダニ類	やや少	並	やや多
茶	炭疽病	やや少	並	並
	カンザワハダニ	並	並	並
	チャノコカクモンハマキ	並	並	並
	チャノホソガ	やや少	並	並
	チャノキイロアザミウマ	並	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	多	多
	チャトゲコナジラミ	多	多	多

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

* 果樹共通・チャバネアオカメムシの発生量（予報）平年比は年次変動が大きいため—としています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：水稻】

1 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多く、前年より多かった。(＋～土)。

・10株当たり払い落とし成幼虫数 0.5頭(平年 0.7頭、前年 0頭)

・発生ほ場率 46.7%(平年 17.9%、前年 0%)

イ 6月1半旬～5半旬のネットトラップ及び県内5か所の予察灯による誘殺数は、平年・前年よりも多く、過去10年間で3番目に多かった(+)。

・ネットトラップ0頭(平年 3.8頭、前年 0頭)

・予察灯 242頭(平年 41.4頭、前年 0頭)

ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 飛来成虫が多い場合、産卵部位の褐変や次世代幼虫の吸汁害により、イネの初期生育が抑制されるので、箱施薬剤を施用していないほ場では、今後の飛来状況に十分注意する。

イ 新規需用米の中にはセジロウンカに弱く、多発するリスクの高い品種があるため、今後のほ場での発生状況に注意する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、13pの内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。

2 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なく、前年並であった。(±～-)。

・10株当たり払い落とし成幼虫数 0頭(平年 0.0頭、前年 0頭)

・発生ほ場率 0%(平年 2.0%、前年 0%)

イ 6月1半旬～5半旬のネットトラップ及び県内5か所の予察灯による誘殺虫数は、平年よりやや少なく、前年よりやや多かった。

ただし、同じ海外飛来性であるセジロウンカの飛来量が多いことから、本種の飛来量も多いと推察される(＋～土)。

・ネットトラップ0頭(平年 0.1頭、前年 0頭)

・予察灯 2頭(平年 2.9頭、前年 0頭)

ウ 定期調査外現地ほ場での見取り調査および黄色粘着トラップ誘殺調査の結果、6月24～26日および6月26～29日の期間でトビイロウンカ成虫を確認した。(+)。

エ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 今後の飛来状況や7月中旬以降の飛来後第1世代幼虫の発生状況に注意する。

イ 箱施薬剤が施用されていないほ場や、箱施薬剤の効果低下が懸念される早植えほ場では、発生状況に注意する。

ウ ほ場内では集中的に生息するので、ほ場全体での発生状況を確認する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

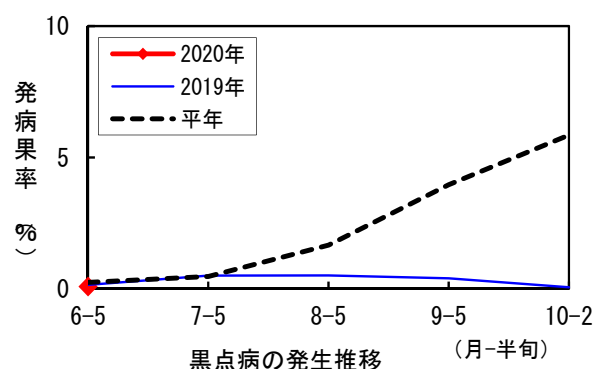
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.1%(平年 0.2%、前年 0.2%)

発病ほ場率 9.1%(平年 7.8%、前年 9.1%)



イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 梅雨時期は、前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。

2 かいよう病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

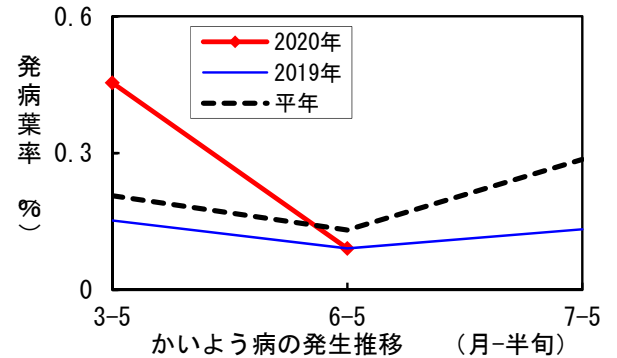
発病葉率 0.1% (平年 0.1%、前年 0.1%)

発病ほ場率 9.1% (平年 9.8%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨媒伝染をするため、発生が多い園では、風雨前の防除を徹底する。



3 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(一~±)。

発生葉率 5.8% (平年 14.8%、前年 24.8%)

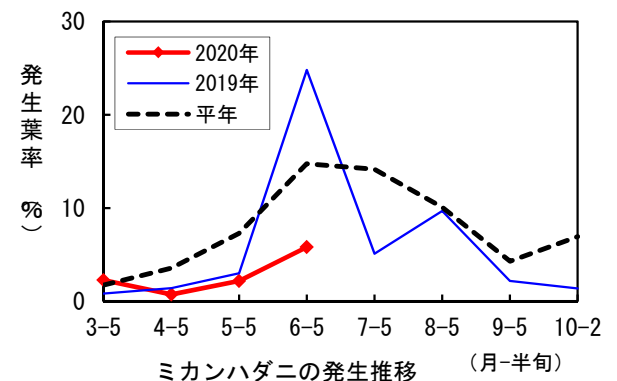
発生ほ場率 63.6% (平年 58.0%、前年 81.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

発病葉率 1.8% (平年 2.6%、前年 1.0%)

発病ほ場率 60.0% (平年 65.4%、前年 45.5%)

発病果率 4.8% (平年 1.6%、前年 0.4%)

発病ほ場率 40.0% (平年 51.7%、前年 36.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

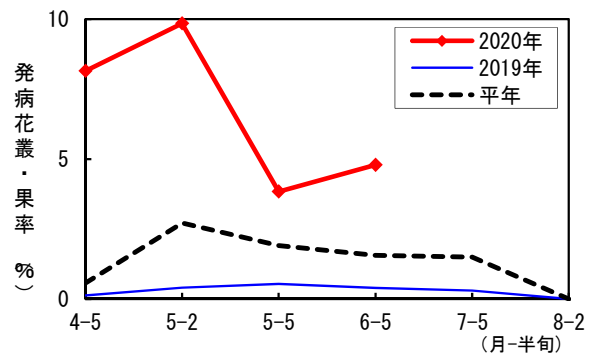
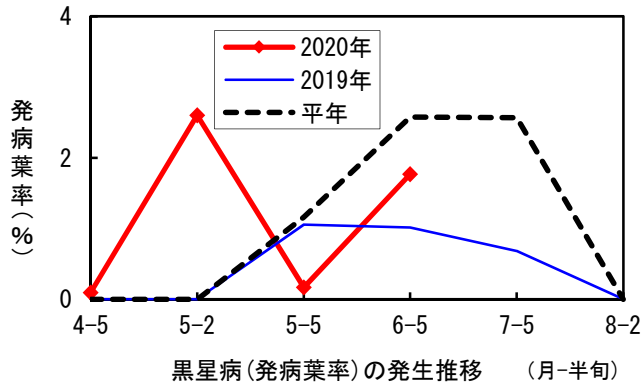
(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP（アザリピリミジン）剤は同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。

これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。



2 ナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 第1～第2世代と考えられる5月1半旬～6月4半旬のフェロモントラップにおけるみ成虫誘殺数は、平年並であった(±)。

朝倉市杷木大山：60頭(平年61頭、前年71頭)

八女市黒木町木屋：62頭(平年71頭、前年64頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

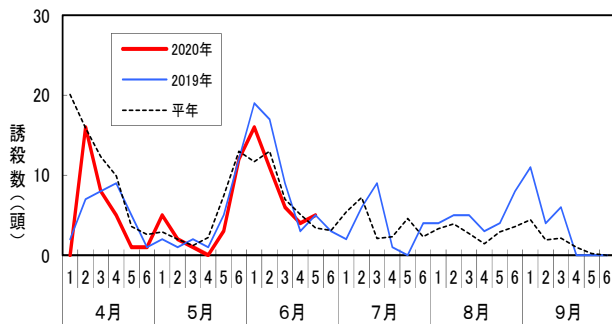
(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月以降の第3～4世代の発蛾最盛期直後(若齢幼虫期)を目安に防除を行う。

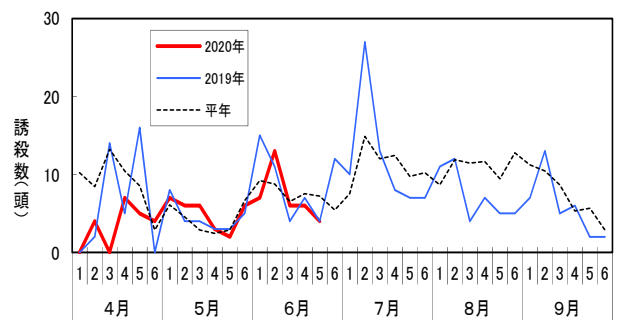
また、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除に当っては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。



ナシヒメシクイ誘殺虫数 (朝倉市杷木大山)



ナシヒメシクイ誘殺虫数 (八女市黒木町木屋)

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

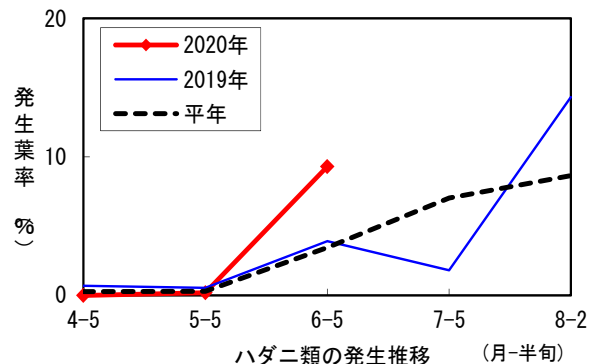
(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

発生葉率 9.3% (平年 3.5%、前年 3.9%)

発生ほ場率 60.0% (平年 35.3%、前年 54.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除が困難になるので、発生が少ない時期に防除を徹底する、また、薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

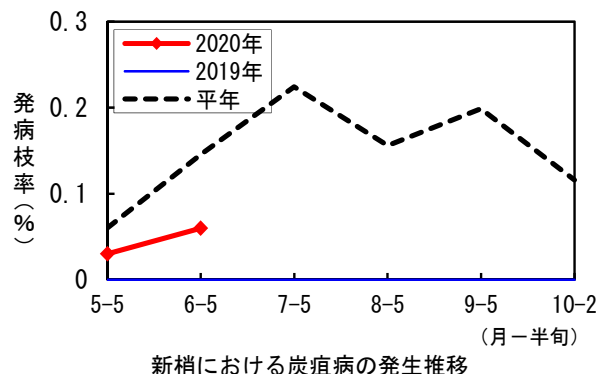
発病枝率 0.06% (平年 0.15%、前年 0%)

発生ほ場率 18.2% (平年 9.6%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生果率 2.9% (平年 4.3%、前年 1.6%)

発生ほ場率 54.5% (平年 67.2%、前年 63.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

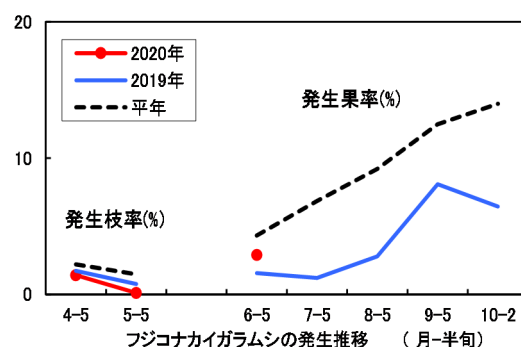
ア 薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的少ない薬剤を選択する。

イ 果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

＜県ホームページ掲載の「令和2年度版病害虫・雑草防除の手引き」うち「防除方法の試験研究成果等」-「果樹」-「X フジコナカイガラムシの発生の生態と防除対策」と「殺虫・殺菌剤一覧」-「果樹」かきの項を参照＞

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html>

ウ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生果率 0.03% (平年 0.2%、前年 0.3%)

発生ほ場率 9.1% (平年 14.3%、前年 27.3%)

* 平年値は2016～19年の平均

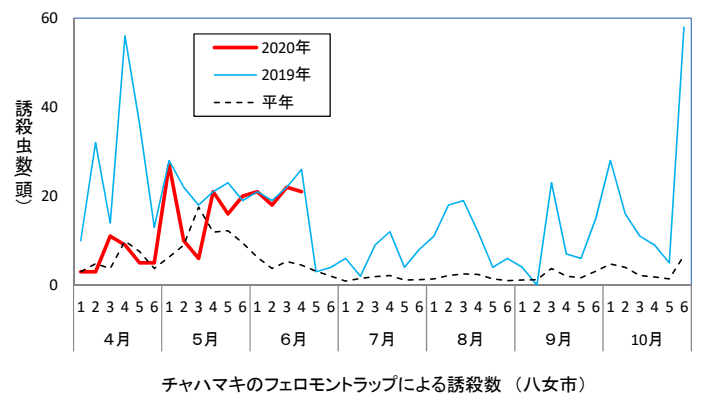
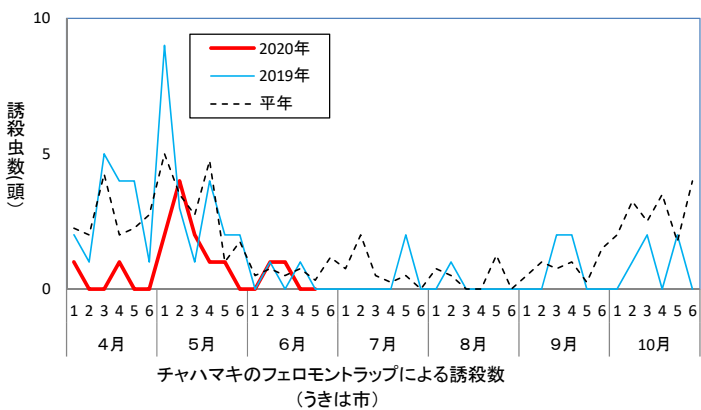
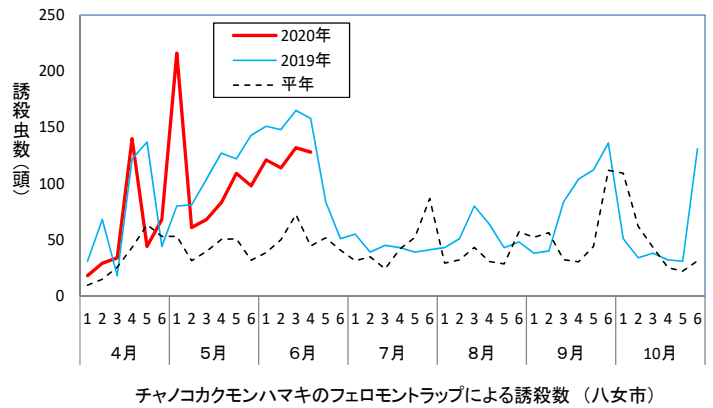
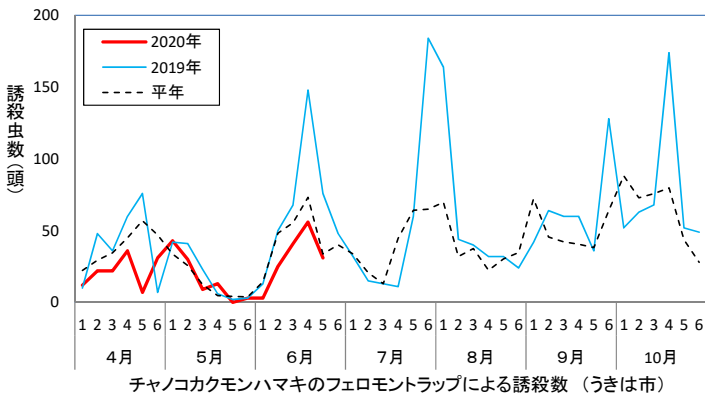
イ 越冬～第1世代と考えられる4月1半旬～6月4半旬までのフェロモントラップによる♂成虫誘殺数は、平年並であった(±)。

誘殺数 チャノコカクモンハマキ <うきは市> 353頭 (平年 511頭、前年 633頭)
 <八女市> 1,463頭 (平年 672頭、前年 1,699頭)
 チャハマキ <うきは市> 14頭 (平年 37頭、前年 40頭)
 <八女市> 218頭 (平年 119頭、前年 380頭)
 *うきは市の平年値は2016~19年の平均

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 成虫の発生に注意し、発生が多い園では発蛾最盛期の7~10日後の防除を徹底する。
- イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

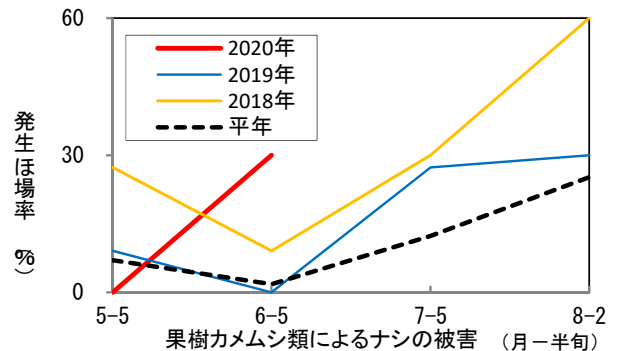
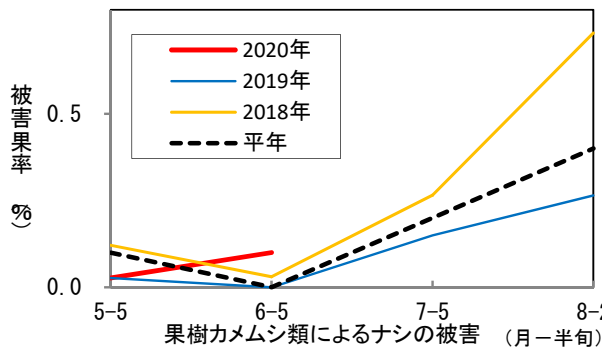
発生量：前年より多(2018年よりやや多)

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、ナシでの被害果発生量は平年より多く(+)、2018年よりやや多かつた。

被害果率 0.1% (平年 0.0%、前年 0%、2018年 0.0%)

発生ほ場率 30.0% (平年 1.8%、前年 0%、2018年 9.1%)



イ 4月1半旬～6月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は前年より多く（+）、2018年よりやや多かった。

誘殺数 <宗像市> 12頭（前年 8頭、2018年 210頭）
 <筑紫野市> 4,259頭（前年 60頭、2018年 3,288頭）
 <うきは市> 1,756頭（前年 2頭、2018年 260頭）
 <八女市> 47頭（前年 1頭、2018年 106頭）

ウ 4月1半旬～6月4半旬までの予察灯による成虫誘殺虫数は前年より多く（+）、2018年よりやや多かった。

誘殺数 <飯塚市> 149頭（前年 49頭、2018年 744頭）
 <筑紫野市> 1,980頭（前年 156頭、2018年 1,617頭）
 <朝倉市> 1,010頭（前年 32頭、2018年 298頭）
 <久留米市> 1,896頭（前年 43頭、2018年 668頭）
 <うきは市> 186頭（前年 5頭、2018年 29頭）
 <八女市> 3,114頭（前年 610頭、2018年 2,459頭）

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

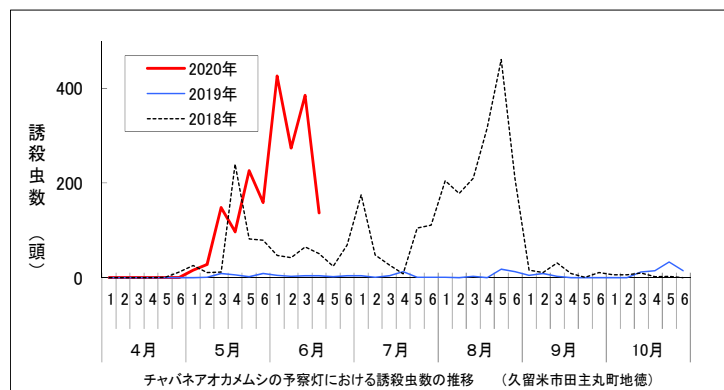
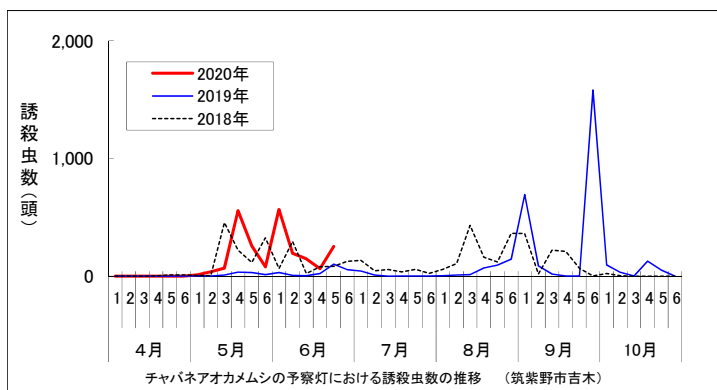
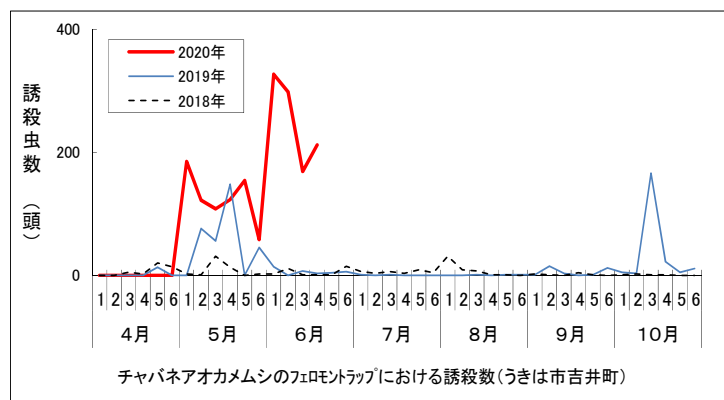
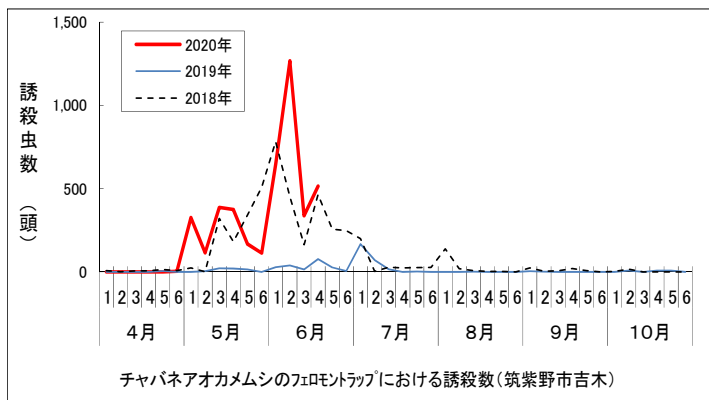
（3）防除上注意すべき事項

ア 飛来や被害発生状況は地域や園により異なり、局所的に発生が多い地域も見られるので、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ カメムシ類は広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除に心掛けるとともに、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

また、降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。



【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた（－～±）。

発病株率 7.1%（平年 13.0%、前年 2.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

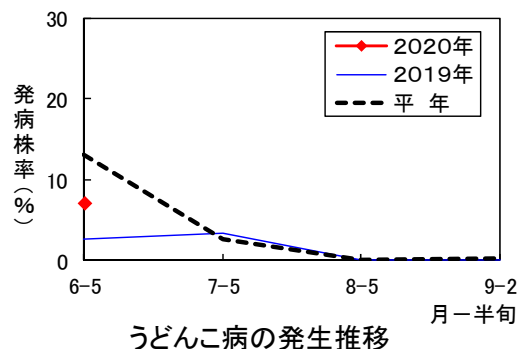
(3) 防除上の注意

ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 苗の間隔を空け通風を図る。

ウ 発生した株については葉かきを強めに行い、伝染源である発病葉を取り除くよう努める。また、摘葉後には薬剤防除を徹底する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する。（以下の病害虫についても同様）



2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.02%（平年 0.03% 前年 0.01%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

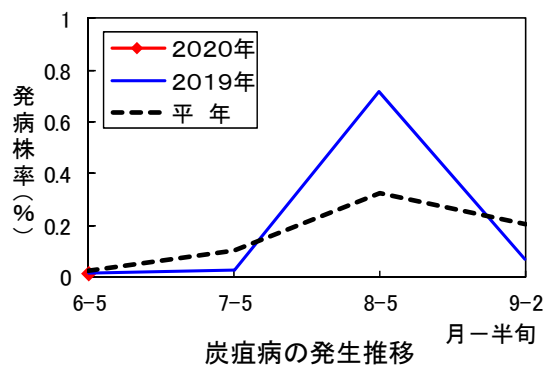
ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

ウ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に予防散布を徹底する。

エ 雨よけ育苗等でも風通しが悪いと拡大しやすいので、苗の間隔を空け通風を図る。

オ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた（－～±）。

寄生株率 5.5%（平年 8.8% 前年 2.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

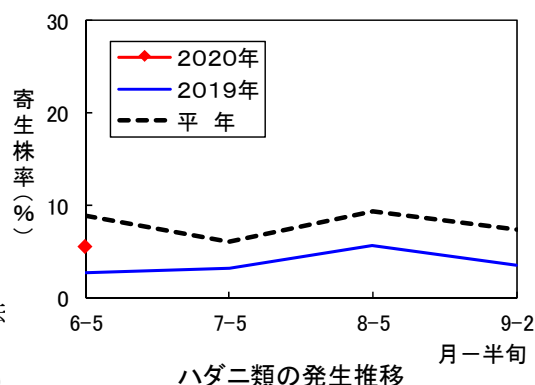
ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 発生した株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り

除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し、処分する。

ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

エ 多発後の防除は困難になるので初発段階での防除に努める。



オ 抵抗性が発達しないように異なる系統の薬剤を組み合わせ定期的に防除を徹底する。
 カ 土着天敵を活用するため、天敵への影響が大きい有機リン系や合成ピレスロイド系などの薬剤を不必要に多することは避ける。

<県ホームページ掲載の「令和2年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/388294_54433708_misc.pdf

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた（-〜±）。

発病葉数 0.6葉（平年 0.9葉、前年 0.3葉）

発病は場率 71.4%（平年 36.3%、前年 66.7%）

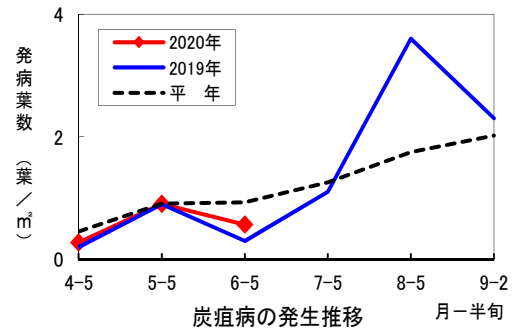
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±〜+）。

(3) 防除上の注意

ア 降雨が多い6〜9月に発生が増加するので、防除は降雨前日までに実施する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、13pの内容を確認の上、適切に実施する。（以下の病害虫についても同様）



2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

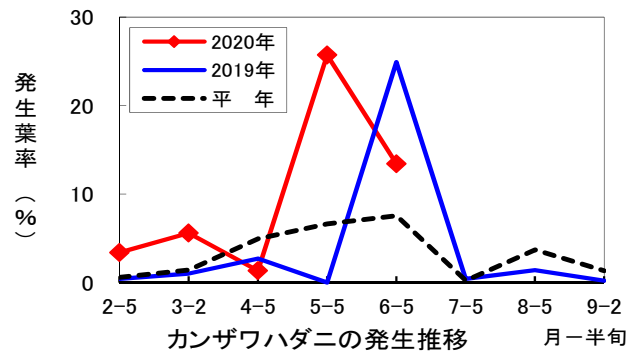
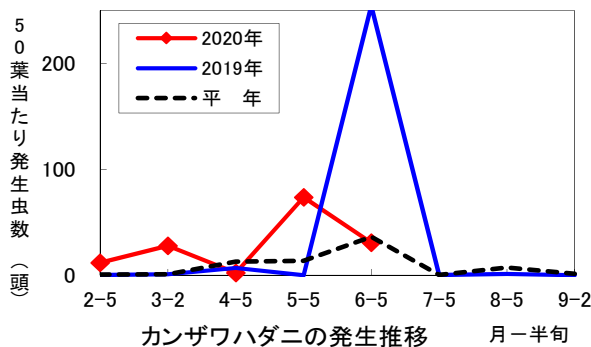
(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

50葉当たり虫数 30.9頭（平年 36.4頭、前年 254.3頭）

発生葉率 13.4%（平年 7.5%、前年 24.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上の注意

ア 多発している園では、チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマの防除と併せて、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

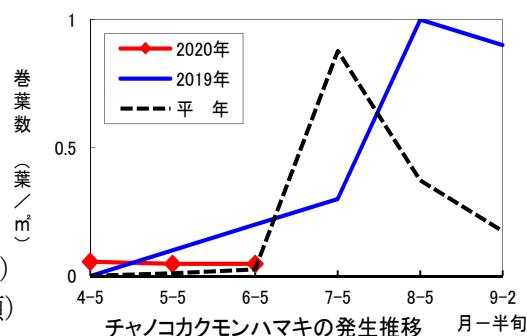
ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 1㎡当たり葉巻数 0.05葉(平年 0.03葉、前年 0.2葉)
 発生ほ場率 14.3%(平年 4.3%、前年 22.2%)

イ 越冬～第1世代と考えられる4月1半旬～6月4半旬までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、平年よりやや少ない～やや多であった(±)。

誘殺数 <うきは市> 353頭(平年 511頭、前年 633頭)
 <八女市> 1,463頭(平年 672頭、前年 1,699頭)

*うきは市の平年値は2016～19年の平均

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

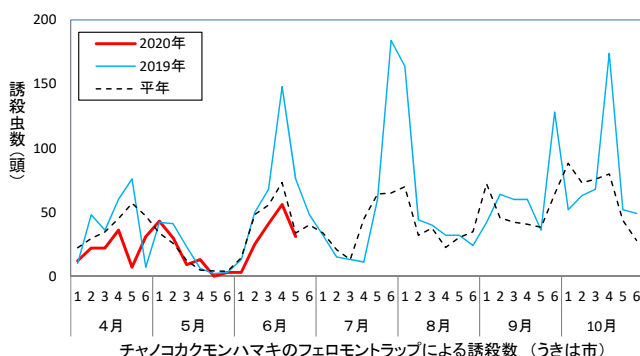


チャノコカクモンハマキの発生推移 月-半旬

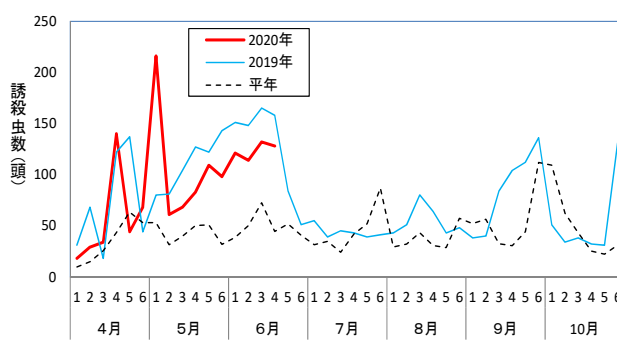
(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は7月下旬頃であるため、ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップによる誘殺数 (うきは市)



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップによる誘殺数 (八女市)

4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(一～±)。

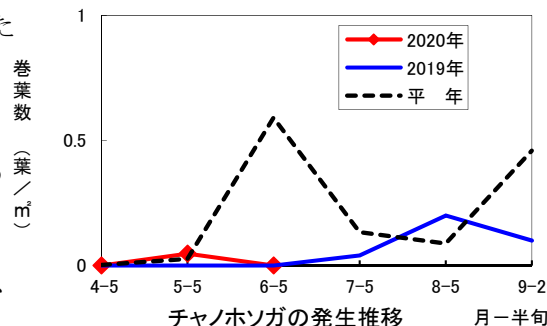
1㎡当たり葉巻数 0葉(平年 0.6葉、前年 0葉)
 発生ほ場率 0%(平年 18.4%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は7月上～中旬頃であるため、ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



チャノホソガの発生推移 月-半旬

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

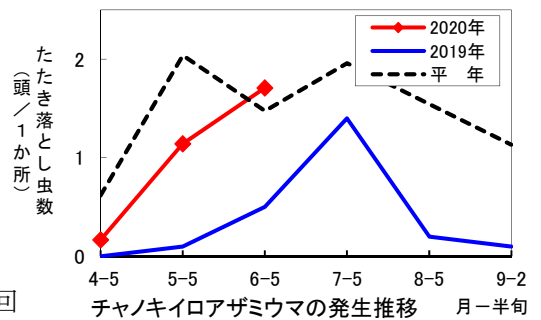
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
たたき落とし虫数 1.7頭(平年 1.5頭、前年 0.5頭)
発生ほ場率 83.3%(平年 65.6%、前年 44.4%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 発生量は6～7月に最も多くなるので、B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

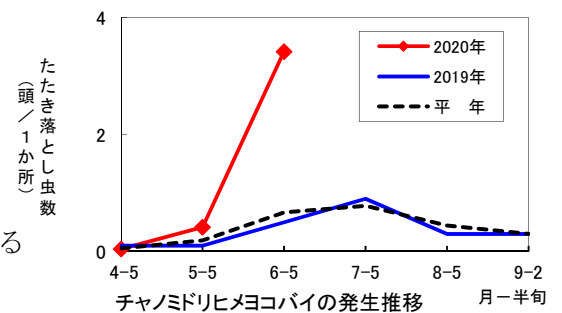
発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)
たたき落とし虫数 3.4頭(平年 0.7頭、前年 0.5頭)
発生ほ場率 100%(平年 55.0%、前年 55.6%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 二番茶期から秋にかけて発生が多くなるため、成幼虫の発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



7 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

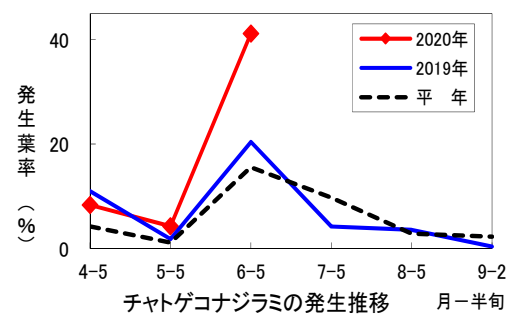
発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)
発生葉率 41.1%(平年 15.6%、前年 20.4%)
発生ほ場率 100%(平年 76.2%、前年 77.8%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は成虫発生後の若齢幼虫発生期である。
防除適期は例年7月中～下旬頃であるが、天候によって変動するので成虫の発生状況をよく観察し、発生がほとんど見られなくなった頃から防除を徹底する。
- イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬を使用する機会が増える6月から8月を農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、「令和2年度農薬安全使用運動」期間と定め、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組みを強化しています。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。

携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。

